



第2分科会は「世代間交流で進める防災ボランティア活動」をテーマに佐藤己美氏・出水和子氏（一般社団法人みやざき公共・協働研究会）、肥田公英（MRT宮崎放送役員待遇ラジオ局長）、川路善彦氏（宮崎日日新聞社報道部次長）の4名の報告を原田多美子協会常任理事（大阪経済大学客員教授）のコーディネーターのもとで行い、次いで出水和子氏の進行により全員で図上訓練と防災かるたの作成をした。参加者は23名（宮崎大学・宮崎公立大学、日本オストミ協会、宮崎学園高等学校、宮崎県立宮崎大宮高等学校、宮崎大学付属小学校PTA、MRT宮崎放送局）。

事例報告① 佐藤己美氏・出水和子氏

一般社団法人みやざき公共・協働研究会は「自分の命は自分で守る」をテーマに自治会、まちづくり協議会、小中高校生、児童・障がい者・高齢者施設、企業、行政と連携し地域防災を展開している。宮崎市の小学生対象の「防災・まちづくりベーシック講座」（2011）から子ども防災博士の認定制度や「子ども防災かるた」が誕生。高校生対象の「そこにあるものを活かして被災時を乗り切る」（2012）は体験型防災学習で、一斗缶釜戸とPP袋使用の炊飯体験は高文連から高く 連携事例を報告する佐藤氏と出水氏 評価された。小中学生と社会人による「異世代交流や次世代育成」（2013）では図上訓練、防災カルタ、ハザードマップを通して地域防災は地域コミュニティの継承・再生にも有効であること提唱した。



事例報告② 肥田公英氏

MRT 宮崎放送は 1999 年から世代を超えた県内のボランティア団体の情報・活動をテレビ・ラジオの番組を通して放送している。さらに「MRT 環境賞」（2001）を制定し、ボランティアを中心に 13 年間に 60 余りの個人や団体を表彰。同年、ラジオ番組「ボランティアワールド」開始し現在も継続中。また、口蹄疫キャンペーン「がんばろう！宮崎」（2010）は終息後も放送やボランティアを通じ復興応援活動を継続している。テレビの朝ワイド情報番組の「防災豆知識」（2013）コーナではボランティア団体の活動を紹介。世代を超えた防災



報道の立場で報告する肥田氏と川路氏 ボランティア情報の提供を使命としている。

事例報告③ 川路義彦氏

宮崎日日新聞社は県内の朝刊紙として 21 万 5 千部を発行。自然災害の多い宮崎県に震度 6 にも崩壊しない印刷機を設置するなど、災害時の防災・災害報道に力を入れている。また、「東日本大震災」（2011）を機に「みやにち防災特集」（2012）を毎月 1 回、11 日付で継続報道し、新企画「新聞紙でつくる防災グッズ」は好評を得ている。「防災はこどもの教育から」をテーマに次代を担う小・中学生対象に「宮日こども防災かるた」（2014）小・中学生各編を作成し販売。河北新報社と共催の「宮崎むすび塾」（2014）は津波避難訓練とワークショップを開催。紙面による啓発と地域連携で実践的な防災・災害報道をめざしている。



防災かるたを考える高校生



NHK航空写真をもとに全員で図上訓練



防災は世代間でつながることの必要性を参加者とともに共有した

出水氏は「自分の命は自分で守る」をテーマに小学生から成人まで女性の視点を生かしたきめ細かな地域防災を提案。コミュニティの脆弱化が課題となっている現在、防災ボランティア活動が世代間交流により、点と点を面に繋げることコミュニティの新たな創生も期待できる可能性を示したことは特に興味深い。

肥田氏はテレビ、ラジオを通して地道に活動するボランティア団体に光をあて、賞を設けることでボランティアを応援している。テレビの質が求められる現在、地元の今を継続して詳細に報道する番組作りは放送局の中でも地方局の強みであり、魅力でもある。

川路氏は過去の災害を糧として今後の災害を見据えた「防災特集シリーズ」および「防災グッズ」は継続することで県民の防災力となりえる。また「防災はこどもの教育から」をテーマに小中学生が楽しく遊びながら防災を意識する「カルタ」や河北新報と共催の「宮崎むすび塾」は地方紙が連携し地域の防災に取り組む姿勢は高く評価したい。

自然災害が多発している現在、それを未然に防止し、またそれを乗り越えるためにも地域が連携し、身近で実践しやすい防災活動であることが大切な要素である。そのためにもマスメディアは繰り返し報道し、啓発することを期待する。多くの示唆に富んだ有益な分科会であった。

(原田多美子)